

東日本大震災発生から一カ月間で考えたこと

本章の冒頭では、東日本大震災から約一カ月が経過した時点で私が感じたこと、行動したことを述べる。

もちろん、既に多くの人が震災当時のことは語ってきたし、いまさらその頃を話題にしてもほとんど意味がないことはわかっている。ただ、私個人としては、これを最初に述べておかないと、どうにも本書の導入としてのおさまりが悪い。これから語っていくように、私にとつても人生を左右する大きな出来事だったからである。

それでもなお、「震災当時の君の考えは、既に興味もないし、その時の話を振り返られても、得るものなどない」と断定される人がおられるかもしれない。それは否定しない。私も、できれば震災は、とりあえず過去のものとして、ここへ来てからの「再生の話題」から始めたかった。だが、それはできそうになかった。

なぜか？ この地では、ずっとずっと被災が進行しているからである。過去のこととして処理することなど、とてもではないが、できなかった。この街における初対面の人との接触は、「震災当時は何をしていた」、「被災後はどうしていた」、「どこに避難して、いつ戻ってきた」ということが、いまだに挨拶代わりだからである。そして、「何のためにここにいいのか」、「震災をど

う感じているのか」が、その次の話題だからである。その部分を省いて、いきなり勢いのある「明日への未来の話」のような内容で、物事を進めることなど到底不可能であった。

私自身、震災の瞬間は埼玉県の行田総合病院に外勤として出向いていた。午後の診察が始まる直前で、私は外来の診察室でパソコンを叩いていた。突然の大きな揺れを感じ、若干の混乱はあったが、「いつもよりは多少大きな震度であろう」と、意外と冷静でいた。ほどなくしてテレビ中継された名取川をさかのぼる津波と、千葉県市原市のコンビナートの火災との映像を目の当たりにして、「ただごとではない」と直感はしたものの、この時点では、まだ想像を遙かに超える被害をもたらすことになるうとは、——そして、私の進路まで変えることになるうとは——想像すらできなかった。

栃木までの帰路は東北自動車道が使えず、信号の灯らない真つ暗な一般道を、いつもの倍の時間をかけて帰った記憶がある。

いま考えると、行田総合病院で東京大学医科学研究所の上昌広教授と震災を共に経験し、彼を熊谷駅まで送ったことが、何か今後の私の運命を暗示していたのかもしれない（後に彼は、南相馬市の医療復興のために多大なる貢献を果たすことになる）。

さて、前置きはこれくらいにして、東日本大震災の発生から一カ月が経過した時点での回想から話を始める。

震災の被害においては、病院の混乱も例外ではなかった。わが大学病院は栃木県の南部に位置し、北は福島県に隣接する。外壁の一部に亀裂を生じ、図書館の水道管が破裂し、一角の書籍が水浸しになったものの、病室や外来には大きな損害はなく、人的被害もなかった。周囲の倒壊した病院から透析患者や寝たきり患者、重症患者の受け入れを果たし、それなりに機能したのではないかと思う。南相馬市（特に、相雲会小野田病院）からも、入院患者を三〇余名受け入れた。

そうかといって私のようなものが、耐震設備や津波の威力、有事の際の行政や自治体、警察・消防・自衛隊・米軍の対応について論じられるものではないし、災害医療においても、私はまったくの素人である。専門的なことは何ひとつとして伝えられない。

だから、医療者として感じた「生きる」という意味の気づきと、「何かができる」という潜在性の確認とについて、少しだけ述べる。

拍子抜けするようだが、震災翌日から私は何をしていたかというところ、いつもと変わらず診療をこなしていた。DMATとして出向いていた同僚医師を脇目に、私は災害に対する特別な知識や情報を持ち合わせているわけではなかった。相談窓口に駆り出されもしなかったし、救命

の腕を買われて現地に派遣されることもなかったし、義援金を募ったり、物資の調達に東奔西走したりするわけでもなく、いつものように来院する予約患者を診療し、相変わらず頭痛やめまいやしびれを訴える患者の診察に明け暮れていた。

もちろん、私のようなものでも医師の「はしくれ」として、愛用している山岳ギアを携えて被災地に赴き、テントを設営して診療に従事したり、義援金募金の先導に立ったり、それでなくともボランティアとして復興の手伝いをしたいという気持ちはあった。しかし、大病院を休診にしてまで、そのようなことはしなかったし、神経内科医のようなものにはそうした要請もなかった。支援する人を、本当に遠くから支援するということしかできなかった。

現地の比ではないが、それでも私はガソリン供給が間に合わないために電車での移動を余儀なくされ、暖房の効かない列車に乗って二時間以上をかけて外勤先の病院に赴いたり、人工呼吸器を装着して在宅療養をしているALSの患者宅に、充電式吸引器を届けに行ったり、停電のなかでパソコンの灯りだけを頼りにデスクワークをこなしたり、いわき市から避難してきた患者を診察したりするような非日常を経験した。

その一方で、学内外を問わず、すべての会議や打ち合わせ、研究会や予定していたイベントがキャンセルされ、また、交通手段のない外来患者の受診が抑えられたために、診療時間を終了す

れば比較的余裕のある日々を過ごしていた。

だから私は、週末には放射線漏れなど気にせず、いつもと変わらずトレッキングのために山に行き、自炊のための買い出しをして、自宅でDVDなどを観て、相変わらず夜な夜な読書をして、このような原稿を書いていた。

「当事者意識が足りない」、「何て呑気な奴だ」と言われれば返す言葉はないが、そんななかでも私は、被災地に関するテレビ中継やラジオ放送をできるだけ見聴きしながら、メディアを通してとはいえ、目の前の現実について考えていた。

震災後に私がまず思ったことは、栃木県南部における被災状況であれば、「これくらいの被害であれば生活にはまったく支障はないし、我慢できるな」ということであった。シンプルな生き方をしている私のような人間にとっては、「多少の電力不足や断水、油の供給不足などは災害に含まれない」とさえ感じていた。

さらに漠然と、「この状況に、いったいどのくらいの人々が耐えられるのか」とか、「他者とつながることに、どの程度の人々が価値を見出せるであろうか」とか、「文明というものを、人はどの程度までそぎ落とせるのか」というようなことを考えていた。そして、「人間はどのようにしたら苦難を受容できるであろうか」ということに想いを馳せていた。